

国語の読む力を育てる

説明文の「自力読みの力」をつけよう その2

筆者の伝えたいことに 意見・感想をもつ

説明文の「自力読みの力」を獲得させる授業を紹介した記事に対し、「美しいしくみ」をとらえさせることで授業が変わった」、「子どもたちの意欲が違って来た」というお便りをいただきました。「説明文の自力読みの力をつけよう」の2回目、今号では子どもたちに「意見・感想」をもたせるにはどうしたらよいかを紹介します。

文章を読むことは
自分の「意見・感想」を
つくること

説明文を学習材にして、わたしたちは子どもたちにどんな「言葉の力」を獲得させればよいのでしょうか。

まずは文章表現に即して、書かれている内容を正確に読み取る力が求められます。段落構成の把握、事実と感想の区別、筆者の主張の理解など、「読解力」の基礎となる、きわめて重要な「読みの力」を説明文の学習を通して獲得させる必要があります。

これはひとゆめ5号の内容

のように、説明文の「美しいしくみ」をとらえることにより、獲得できる力です。

いまひとつ、説明文の学習によつて獲得させたい「言葉の力」があります。それは、「自己表現力」です。

ある事実、ある主張、ある認識が、いかに表現されているかを、説明文を学習材として学ぶことが求められます。そして、その学びによつて、**「自らが人に伝えたい事実、主張、認識を効果的に表現する方法を獲得すること、それがすなわち「自己表現力」です。**優れた説明文は、優れた自己

表現の方法を学ぶ格好の学習材といえます。

真の「読解力」を育成するためには、根本的な国語授業観の転換が必要となります。読解力をはぐくむ授業は、教師の求める「正解」とされる解釈を探ることではありません。学習材である文章を読むことは、その文章に対する自分の意見をもつことであると、子どもたち自身が明確に認識しながら学習を進める授業へと転換することが不可欠です。

文章に対する自分の「意見・感想」をつくることこそ大切な学習であることを子どもたちに

しっかりと認識させることが大切なのです。

自己表現力をはぐくむ
授業実践

自己表現力をはぐくむ授業実践として、わたしの国語教室の五年生ときの取り組みを紹介しましょう。

学習材は、丘樵三の『日本の子どもたちと、世界の子どもたち』。次のページにその全文を掲載しましたが、語彙も難解なものはなく、これまでに説明文の「美しいしくみ」を学習した子どもたちには読みやすい文章と

筑波大学附属小学校教諭
二瓶 弘行

にへい ひろゆき*1957年新潟県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。新潟県内の公立小学校に勤務。その後、上越教育大学大学院の修士課程を修了。1994年から筑波大学附属小学校教諭、現在に至る。立教大学兼任講師、全国国語授業研究会理事、国語教室ネットワーク「ひろがれ国語」代表。隔月刊「基幹学力の授業 国語&算数」(明治図書)国語編集長。「夢」の国語教室創造記「いまを生きるあなたへ贈る詩50」(ともに東洋館出版社)、「二瓶弘行の説明文一日講座」(文溪堂)など著書多数。

日本の子どもたちと、世界の子どもたち

丘 樵三

- 1 今、この世界には二百近くの国があります。わたしたちのすんでいる日本という国も、その一つです。
- 2 日本に住む子どもたちは、幸せです。毎日、ごはんを食べることが出来ます。学校へ通っていろいろな勉強をすることができます。病気になるれば、病院で治してもらえます。
- 3 では、ほかの国に生まれた子どもたちも、日本の子どもたちと同じように幸せなのでしょう。
- 4 まず、毎日の食事でさえ、きちんととれない子どもたちが、世界にはたくさんいます。きらいな食べ物や残して、とんどんすてている日本の子どもたちには、想像もできないでしょう。どんなにおなかですいても、食べるものがないのです。
- 5 その結果、生きていくための栄養が不足して、体力がなくなり、ちょっとした病気がかかって死んでしまうのです。
- 6 また、学校へ通えない子どもたちもたくさんいます。日本の子どもたちのように、習い事に行くなんて、とんでもありません。いくら勉強したくても、字が読めるようになりたくても、計算ができるようになりたくても、学校へ行けないのです。
- 7 その大きな理由は、まずしいことです。親の仕事を手伝ったり、小さな弟や妹の世話をしたりして、毎日働かなければならないのです。そうしなければ、家族みんなが生きていけません。また、教科書がなく、鉛筆やノートさえも買えない子どもたちもたくさんいます。
- 8 さらに、病気で命をなくす子どもたちが、世界にはたくさんいます。日本の子どもたちは、ちょっとと熱がいつも高いと、親がすぐに病院に連れて行ってくれます。いろいろな薬もあります。病気を予防する注射もうってもらえます。
- 9 けれども、病気になるっても、お医者さんがいなく、薬がなく、しかたなく死んでいく子どもたちがいるのです。一、二、三秒。このわずか三秒の間に幼い子どもが一人、そのために世界のどこかで死んでいます。
- 10 このように、世界には、今、このときにも、栄養不足で苦しんだり、病気になる命をなくしたりして、つらい生活をしている子どもたちがたくさんいます。だから、世界の子どもたちみんなが、幸せだとはけつて言えないのです。
- 11 日本の子どもたちは、この国に生まれたことに感謝して、毎日楽しく生活しましょう。そして、今は子どもだから何もできませんが、いつか大人になったら、世界中の子どもたちが幸せにくらせるように力をかけてあげましょう。

なっています。

通読した後、三つの大部屋(はじめの大部屋〈序論〉・説明の大部屋〈本論〉・おわりの大部屋〈結論〉)の基本構成を確認します。さらに序論と結論の性格を大きく把握していきます。序論は段落①③、序論の性格は「話題の提示」と「問いの投げかけ」になっていることを押さえます。

また結論は段落⑩⑪であり、結論の性格は「おわりのまとめ」「問いの答え」「筆者の考え・読者へのメッセージ」の三つをあわせもっているという子どもたちもすぐに読み取ることが出来ます。

続けて、本論の小部屋(意味段落)の構成を「名前」を考えながら検討していきます。

本論は④⑤であること、三つの小部屋が、二段落ずつで構成されていることも容易につかめるでしょう。

小部屋の名前を考える際には、次の三つのポイントを意識します。(小部屋の名前つけについては、ひとゆめ5号で詳しく解説しています)

大部屋	小部屋	段落	小部屋の名前
序論	1	1	*性格 ○話題の提示 ○問いの投げかけ
	2	2	*食事をとれない 世界の子どもたち
	3	3	*学校へ通えない 世界の子どもたち
本論	4	4	*病気で命をなくす 世界の子どもたち
	5	5	*世界の子どもの生活
	6	6	*学校へ通えない 世界の子どもたち
結論	7	7	*問いの答え ○筆者の考え
	8	8	*問いの答え ○筆者の考え
	9	9	*問いの答え ○筆者の考え

ここまでの学習で、この説明文の要旨(文章の伝えたい事実の中心、筆者の伝えたい考えの中心)は、ほとんど把握できたといっているでしょう。

けれども、文章の要旨を正確に受け止めただけでは、説明文の読みは完結しないことを五年生の子どもたちに教えます。ここから新たな学習の段階となります。

この文章の筆者・丘 樵三さんは、先生の古くからの知り合いです。「日本の子どもたちに向けた文章を書いたのだが、実際に子どもたちに読んでもらって感想を聞きたい」と言っていて、先生にこの文章を送ってきたんです。丘さんは、日本の子どもたちに伝えたくてたまらないことがあって、この説明文を書きました。そして、日本の子どもたちであるみんなに読んでほしい、感想・意見をもらいたいというのです。一生懸命に読み、考えて、丘さんのこのお願いにこたえてあげよう。

PISSA型読解力育成の風潮のもと、全国各地で「批評読み・批判読み」の実践が展開されています。書いてあることを正確に読み取ること、終始する読解学習を越えて、読みの主体を学習者である子どもに置く、説明文の学びの方向性を、わたしは肯定します。

けれど、説明文の読みでどうしても重視したいのは、筆者への「敬意」です。精一杯の工夫をして書いた筆者の思いを否定

文章を精読するという学習が成立するのです。また、文章に対する「批判・感想」の多様性も、仲間の意見を聞くことによって学ぶことになり。それはまた、「文章に対する感想・批評を形成する力」をはぐくむことにつながるのです。

だからこそ、あらゆる国語授業で、子どもたちがそれぞれの読みを互いに交流し合う活動の場を重視する必要があります。一部の限られた子どもたちによる話し合いではなく、**学級全員の子どもたちに、自分の意見を話し伝え合う場を保証しなければならぬ**のです。「話すこと」によって、「読解力」は高まるのですから。

この説明文の学習においても、次の発言がきっかけで、読みが深まっていきました。

「7段落目の最初に『その大きな理由は、まずしいことです。』という文章があるでしょう。『その』ってというのは前の段落を指しているから、『学校へ行けない大きな理由は、まずしいこと』になるけれど、

「**批評読み・批判読み**」を認めません。だから文章の欠点を喜々として探す「嫌な読者」を育てようとは思わないのです。そこで、子どもたちには次のように指導します。

説明文を読むとは、筆者が伝えたいことを読み取るだけではありません。

その筆者が伝えたいことが、どのように表現されているかを考えることが必要です。そして、その表現のしかた、論の展開のしかたについて、その良い、またはここをこうしたらいいな、という改善点を自分なりに考えてみるのが大切です。

さらには、筆者の伝えたい考えや意見に対して、読者として自分の感想をもつこと。

読んで説明文に対して、自分なりの感想をもつことができ、はじめて説明文が読めたということになります。感想をもつことは、説明文を書いてくれた筆者への礼儀でもあるのです。

文章の展開を見直した子どもたちは「美しいくみ」を意識し、日本と世界を比較説明して

まずしいから学校に行けないだけじゃなくて、まずしいから食事が満足にとれないし、病気にもなるんだと思うの」

「7段落目の最初にある『その大きな理由は、まずしいこと』ってという文章は、三つの小部屋全体にかかるようにしたほうがいいんじゃない？」

子どもたちの発言が盛んになったところで、筆者・丘さんのメッセージを受け、日本の子どもへのひとりとして意見をもち、返事を書く活動にはいります。

子どもたちがこだわったのは、「幸せ」という言葉と、「子どもだから何もできない」という丘さんの考え方についてです。丘さんへの返事を紹介しましょう。

最後の①段落に「日本の子どもたちは幸せです。この国に生まれたことに感謝して…」というメッセージがあります。わたしも賛成です。今の日本の子どもたちは「生きていける」という面ではとても幸せです。だから、この国に生きてくれた両親に感謝します。けれど本当に日本の子ども

いることで、わかりやすい文章になっっていることを実感します。

『では』『まず』『けれども』『その結果』など、接続詞を効果的に使用していることが文章の読みやすさにつながっていることも押さえることができます。

- 文章の良さ**
- ①美しいくみの文章であること。
 - ②接続詞がうまく使われていること。
 - ③日本と世界を比較して説明していること。

これらの点を押さえたあとに、説明の小部屋の並び方について考えます。

小部屋の①は④⑤段落、食事をとれない世界の子どもたち、小部屋の②は⑥⑦段落、学校へ通えない世界の子どもたち、小部屋の③は⑧⑨段落、病気で命をなくす世界の子どもたち、最初に「食事」をもつてくるよりも、読者である子どもたちにとつて身近な「学校」から論を進めるべきではないか、とい

私たちは幸せなのでしょいか。友だち関係での悩み、だから来たのかわからない悪口のメール。一年間に自殺者は約三万人。こんな世の中に生きていて、本当に日本の子どもたち全員が幸せだといえるのでしょうか。

確かに、日本にはわたしのように幸せを感じる子どもたちはたくさんいます。世界の子どもたちは、それに比べて「幸せでない」といえるかもしれません。

しかし、まずしくても笑顔で精一杯生きようとする子どもたちがいるでしょう。自分の幸せは、自分で決めるもの

です。子どものわたしがこんなことをいうのは生意気ですが、「幸せ」の言葉の意味を考えてつかったほうがいいと思えました。

もうひとつ気になったのが「今は子どもだから何もできませんが…」という一文です。子どもでも募金ができるし、わたしたちのようにユニセフ活動をすることがあります。だから、せめて「子どもでもできることを考え、努力してみよう」というようにしたらどうでしょう。

う意見が出てきます。

さらに命に関わる「食事」と「病気」は続けて論じるべきではないか、といった意見も飛び出します。食事をとれないことが原因で病気になるし、病気を治せず食事をとれないことが病気を悪化させ、死にいたるといふ論の流れにすべきではないか、という意見を述べる子ども出てきます。

「話す」活動の充実が「読解力」を高める

国語授業では、ともに読み合う「仲間」がいます。この「仲間」の存在が、個々の「読解力」を高めるのです。

ある一編の意見文に出会い、その文章の段落構成を把握し、要旨を読み取り、筆者の意見をまとめる、この一連の読みの過程で、仲間の存在はとても重要です。子どもたちは、自分とは異なる仲間の意見を聞き、自分の読みを仲間に伝えることにより、自分の読みの妥当性を確かめたり、修正したりします。こうした「読み」の交流によって、

お気づきの方もいるかも知れません。丘 樵三は「おかしなぞう」と読む、わたしのペンネームです。子どもたちに説明文を読むことの意義を教えるためにこの文章を書いたのです。

説明文の最終段階で子どもたちに自分の意見を述べる、書くという活動をさせるのであれば、**クラスの実態に応じた説明文を、受けもちの先生が書けばいい**のです。文学的文章を書くことはできなくても、説明文なら書けるはず。クラスの子どもたちが意見をもちやすそうな内容で、ぜひ書いてみてください。そして、学級全体の子どもたちに、自分の意見を話し伝える場を保証してほしいと思います。

これ一冊で説明文の授業のしかたがわかる！

二瓶弘行の「説明文一日講座」



B5変型判 128ページ
二瓶弘行著 (文溪堂)
定価1,680円